# 失われた絆を取り戻さん(霞、綾音、隼、疾風)

猛禽龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
失われた絆を取り戻さん（霞、綾音、隼、疾風）

【Ｎコード】
Ｎ１７０２Ｂ

【作者名】
猛禽龍

【あらすじ】
かすみと綾音が少しでも関係改善してくれたらなと、仲良くなればいいなと思ったんですが、それにはハヤブサと疾風の協力が不可欠だと思ったんで、書いてみました。ＤＯＡのハヤブサＥＤの手紙が疾風からだったらと仮定しました。この話の続編と言う事で、もう一作書いております。

３度目のＤＯＡ大会が終わって、ハヤブサはある人物から手紙を受け取った。
それは彼の親友である疾風からのものだった。
内容は彼の妹、かすみについて。
兄の自分に出来る事は僅かでお前にもかなりの負担をかけるが、厭わないならば助けてやって欲しいと言うものだった。
そして、かすみは今、ある場所にいるとも書いてあった。
リュウはかすみを見つけ出し、疾風の意向を伝えると、すぐに自分と共に日本を発てと告げた。
行き先はニューヨーク。リュウの第二の故郷である。
かすみは了解したものの、ある事を成してから発ちたいと言う。
それは、彼女の異父妹である綾音の事だった。
「本当にいいのか、かすみ。言いたくは無いが…」
かすみは、綾音とどうしても話したいと言って聞かなかった。
リュウとしては、そんな事態を避けたい。二人が無事でいられる保障は無いからだ。
かすみはともかく、綾音は霞を憎んでいる。
リュウは綾音の出生の秘密を知っていた。
「あの子は私を、憎んでいますよね」
綾音は奇しくも自分を抹殺するために送られたくの一。
しかしそれ以前に、綾音が今まで自分に投げつけた言葉、そして自分を見る目には憎悪が滲み出ていた。
「ハヤブサさん…私と綾音は、小さい頃、ほんの少しの間だけですが、
一緒に遊んだ事があるんです。
私の周りは年上の人ばかりだったから年下の綾音が可愛くて…
本当に妹だったらいいなって思っていました」

かすみは寂しそうに笑う。
「かすみ…」
「このままではいけないんです。
もう、ずっと前から何とかしたい、そう思っていましたから」
そう、第一回目のＤＯＡ大会へ出場するきっかけとなった、真実を知った時から。
「それに、あの子は私を追ってきてる。
安全に逃げる為にも、綾音を放ってはおけないと思いませんか？」
日本からニューヨークへ行くには、飛行機か船だ。
確かにそのどちらに乗っても襲撃は大いにあり得る事だ。
更に運が悪い事に、逃げ場が無い。
「…俺が戻るまで、無事でいられるな？」
ハヤブサは、確かめるようにかすみを見る。
「やってみます」
かすみは強い決意を宿した表情で頷いた。
ほどなく、綾音は現れた。
「見つけたぞ！かすみ！」
妹…私への憎しみに溢れているこの子が…
「待って綾音！貴女と私は…」
「うるさい！お前と血が繋がっているなんて、考えるだけで汚らわしい！」
問答無用で、綾音は霞に激しい攻撃を繰り出してきた。
霞は綾音の攻撃を上手くさけながら知ってたんだわ、この子…と思った。
「で？それが何だって言うのよ。私の家族は幻羅父様だけよ！…！」
一瞬綾音に隙が生じ、かすみは綾音の背後に回っていた。
「しまっ」
「ごめんね…」
「うっ…」
ぎりっと綾音の首を絞める。

一方、ハヤブサは自分に出せる限りのスピードで疾風のいる里へ向かい、
たどり着いていた。
「疾風」
「！リュウ…」
リュウは疾風にすぐ綾音の任務を解くよう言った。
疾風はその旨を手紙にしたためると、ハヤブサに渡す。
「恩に着る」
疾風が呟いた。
「何の」
そして龍は再び走り始めた。
かすみ、そして綾音。二人とも無事でいろよ、と念じながら。

首を締め付けられ、綾音は意識が朦朧としていた。
「は、はや…て…」
薄れ行く意識の中、綾音は思わず脳裏に浮かんだ人物の名を口に出していた。
かすみは首を締める力を緩め、ぱっと距離をとった。
綾音は喉を押さえ、激しく咳込んだ。
「ごめんね、苦しかったでしょう？」
かすみが言う。綾音の心に警戒心が湧いた。
止めをささないなんて、何を考えている？
「綾音、疾風兄さんが好き？」
「！」
綾音は目を見開いた。
「いいのよ、私も兄さんが好きだから」
私と同じ思いを抱えている、半分だけ血の繋がった妹…
「あんた、自分が何を言ってるかわか」
「分かってるつもりよ、でも兄妹だから。兄妹って嫌ね」

その顔が、誰かに重なった。綾音の養父、幻羅。
「…」
「かすみ！綾音！二人共待て！」
そこへ、ハヤブサが現れた。

「リュウ様！？」
驚く綾音。
「ハヤブサさん」
対して、かすみは動揺していない。
「綾音、お前の任は解かれた。すぐに里へ帰れ」
「どう言う事！」
だがハヤブサはそれに答えず、黙って懐から手紙とおぼしき紙を取り出すと
綾音に渡し、そしてかすみの方を向いた。かすみが頷く。
綾音はハッとした。
手紙の内容を素早く確認して、
ハヤブサの言葉に嘘が無いのが分かり更に確信する。
そうか、そう言う事だったのか。
きっと、この二人の事は疾風様も知っているに違いない。
その時である。
「！」
不意にかすみはスッと綾音に近づくと、呆然としていた綾音の髪を一度撫でた。
「疾風兄さんをお願い、貴女が支えてあげてね」
「かすみ…どこへ…」
「さようなら」
もう二度と会う事は無いだろう、妹。そして兄、両親、里の皆。
綾音は黙ってその場から立ち去ろうとして、一瞬だけ振り返った。
かすみは寂しそうに微笑んでいた。
この時の霞の表情は綾音の脳裏に焼きつき、事あるごとに思い出す

事になる。

綾音が里へ戻ると、疾風が待っていた。
「綾音、急に呼び戻してすまなかったな」
「いえ…」
綾音は彼に向かい頭を下げた。
「ご苦労だった、下がって休め」
「はい…」
疾風は、かすみの事は何も聞かなかった。

…そして、あれから数年が経った。何かの弾みに彼女の事を思い出す。
彼女はどうしているだろうと。
あの時の事を思い出すと、ひどく懐かしい気持ちになる。
初めて私とかすみの気持ちが通じた…

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1702b/

失われた絆を取り戻さん(霞、綾音、隼、疾風)

2010年10月13日17時27分発行